

平成 22 年度 日本海マアジ長期漁況予報

今後の見通し (2010 年 5 月～9 月)

対象海域：島根県～新潟県

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0 歳魚 (2010 年級群 (2010 年生まれ))、1 歳魚 (2009 年級群)、
2 歳魚 (2008 年級群)

- (1) 日本海西部では 1 歳魚が主体で、夏以降は 0 歳魚の割合が増加し、
全体の来遊量は前年並み。
- (2) 中北部でも 1 歳魚が中心で、前年並みの来遊が見込まれる。

※「前年」は 2009 (平成 21) 年 5 月～9 月を示す。また、「体長」は尾叉長で測定した。

漁況の経過 (2009 年 4 月～2010 年 3 月) 及び今後の見通しについての説明

1. 資源状態

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系資源の一部であり、その動向は東シナ海域の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北部、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0 歳魚として対馬暖流に沿って能登半島以北に分布を広げる。越年して 1 歳魚となると、春季に九州西・北部から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その他に 1 歳以上に成長したものが日本海での越冬傾向が強くなり、やがて地付き群として日本海で産卵し、中北部で漁場を形成するものと思われる。

対馬暖流系の資源量は 1970 年代後半に低水準にあったが、1980～1990 年代前半に増加し、1993～1998 年に高水準を示した。1999～2002 年に資源量は減少したが、2003～2004 年に資源量は高水準に回復した。2005 年以降の資源量は減少したが、2008 年の加入量が増加したため、資源量もやや増加したと推定されている。高水準期 (1993～1998 年) には対馬暖流域全体で約 20 万トンの漁獲を維持していたが、1999～2002 年は 13～16 万トンに減少した。2003 年から漁獲量は再び増加し、2004 年には約 19 万トンであったが、2008 年には 13 万トンに減少した。日本海における島根県～新潟県の主要港の水揚げ量は 2002 年に 40,000 トンに減少したが、2003 年以降増加傾向を示し、2004 年には 68,000 トン

ンを記録した。しかし、2005年以降、2007年および2009年を除けば40,000トン前後に止まっている。2009年の水揚げ量は約54,000トンで、前年および平年（過去5か年（2004～2008）平均値）を上回った（図1）。

2. 漁況の経過

2009年4月～2010年3月における島根県～新潟県の主要港で水揚げ量は51,000トン（各府県の速報値等の集計による）であり、平年（49,000トン）及び前年同期（39,000トン）を上回った。日本海のマアジの漁獲量はまき網と定置網によるものがほとんどであり、例年、定置網の占める割合は概ね20%以下で、まき網によるものが全漁獲量に大きく影響している。2009年4月以降のまき網の漁獲量は2009年11月～2010年3月の5か月を除けばすべての月で前年を大きく上回り、まき網の漁況は全般的に好調であった。定置網の漁況もまき網とほぼ同様な傾向を示し、ほとんどの月で前年を上回り、好調に推移した（図2）。地域別では、定置網が中心の中北部の漁況は昨年春から秋にかけて前年および平年を上回ったものの、年明けから春にかけて前年および平年を下回った。まき網が中心の西部の漁況は11月～3月の5か月を除けば概ね前年および平年を大きく上回り、定置網と同様に全般的に好調に推移した（図3）。

3. 今後の見通しの説明

今後の日本海西部における漁獲の主体は1歳魚（2009年級）で、初夏以降0歳魚（2010年級）の割合が高くなると思われる。昨年資源評価の結果及び漁況の推移から2008年級（2歳魚）は2007年級を上回る豊度と考えられる。2009年5～6月に日本海西部で行ったトロール調査によるマアジ稚魚の採集数と水温分布から算出した2009年級の加入量指数は前年より増加したこと、および秋におけるまき網の0歳魚の漁況は堅調であったことから2009年級は豊度の高い2008年級と同程度と考えられ、1歳魚は好調の前年と同程度か上回ると見積られる。また2010年級（0歳魚）については予測が難しく今後の海況によって加入量が大きく変動する可能性もあるが、2009年級と同程度と考えると、日本海西部から夏以降の中北部では、0歳魚は前年並み、1歳魚と2歳魚は前年と同程度か上回る来遊が考えられるが、2010年以降の漁況経過が前年を若干下回ったことから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

日本海中北部については、定置網中心に初夏以降 0 歳魚の漁獲に占める割合が高く、2009 年級群の加入が順調であったことから、1 歳魚を中心にした相応の来遊が予想され、今後の漁況は好調の前年並みと思われる。

日本海に来遊するマアジは、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見られる。期間中 6 月までの対馬暖流域の 50m 深水温は平年並みで経過するとされているが（平成 22 年度第 1 回日本海海況予報、日本海区水産研究所）、春先から日本海西部の水温が前年同期に比べて低く推移していることから、マアジ漁況への環境面からの影響を今後注目する必要があると考えられる。

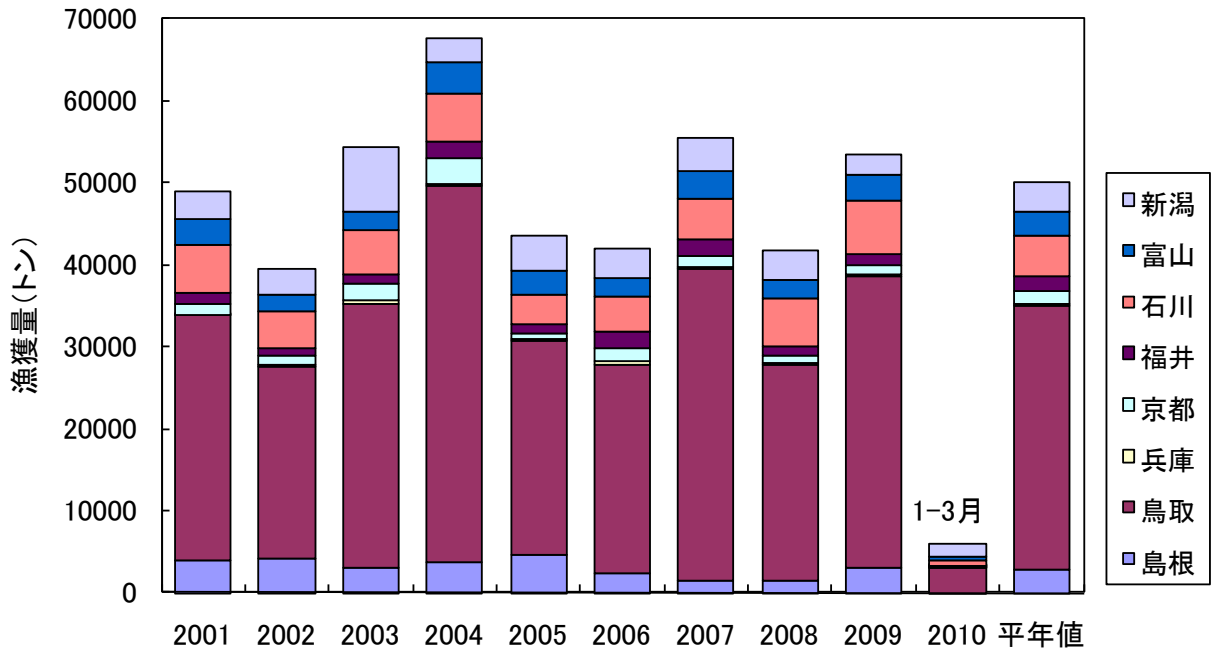


図1 日本海主要港（島根県～新潟県）の水揚げ量の推移（2010年は1月～3月）。
平年値は過去5か年（2004～2008年）の平均値を示す。

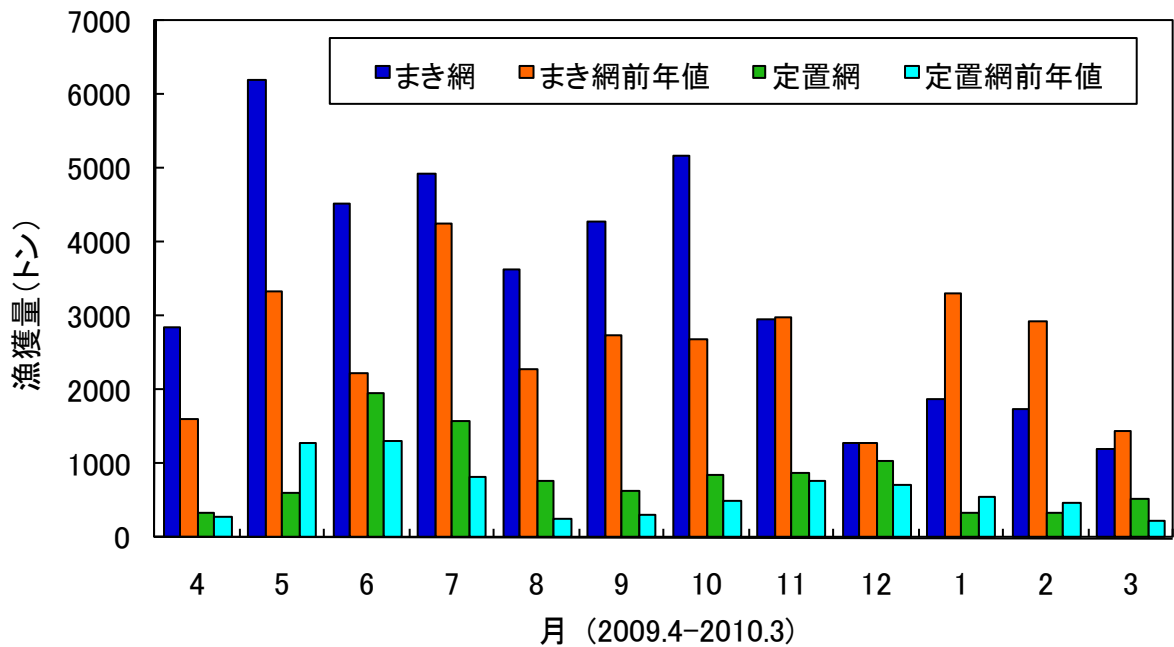


図2 漁業種類別漁獲量の経月変化（2009年4月～2010年3月）。
前年値は2008年4月～2009年3月である。

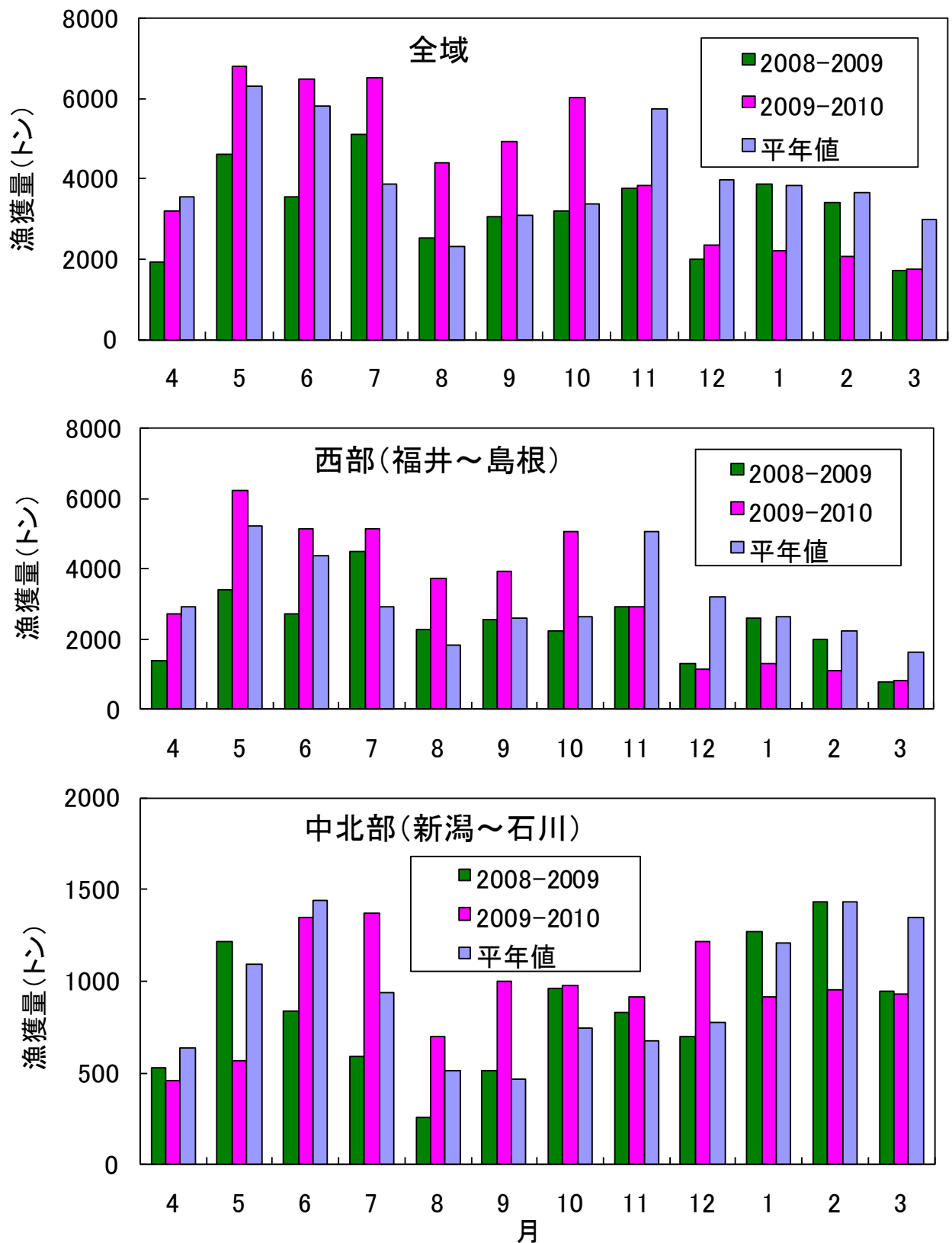


図3 日本海主要港への水揚げの経月変化

平年値は過去5か年（2004～2008年）の平均値ならびに前年は2008年4月～2009年3月を示す。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	京都府農林水産技術センター 海洋センター
秋田県農林水産技術センター 水産振興センター	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
山形県水産試験場	鳥取県水産試験場
新潟県水産海洋研究所	島根県水産技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	社団法人 漁業情報サービスセンター
石川県水産総合センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
福井県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所 日本海区水産研究所